







平成 28 年度発掘調査報告書





序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、平成28年度に当センターが発掘調査をした遺跡の調査成果をまとめ、調査報告書及び調査概報として発刊するものです。全県下で31遺跡、約13.9万m²が調査され、縄文時代から近世までの遺構、遺物が検出されております。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました委託者をはじめ、地元の各市町村教育委員会及び関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成29年3月

公益財団法人 岩手県文化振興事業団
理 事 長 菅 野 洋 樹



目 次

平成 28 年度発掘調査の概要について 1

I 発掘調査報告

(1) 岩洞湖 I 遺跡（盛岡市）	7	(3) 八森遺跡（洋野町）	29
(2) 柄洞 IV 遺跡（遠野市）	11		

II 発掘調査概報

(4) 岩井沢遺跡（宮古市）	39	(18) 千徳城遺跡群（宮古市）	53
(5) 北ノ沢 I 遺跡（洋野町）	40	(19) 沼里遺跡（宮古市）	54
(6) サンニヤ I 遺跡（洋野町）	41	(20) 根井沢穴田 IV（宮古市）	55
(7) サンニヤ III 遺跡（洋野町）	42	(21) 田屋遺跡（大槌町）	56
(8) 北鹿郷遺跡（洋野町）	43	(22) 追田 I 遺跡（大槌町）	57
(9) 宿戸遺跡（洋野町）	44	(23) 狹田館跡（大槌町）	58
(10) 小田ノ沢遺跡（洋野町）	45	(24) 小白浜遺跡（釜石市）	59
(11) 芦ヶ沢 I・II 遺跡（久慈市）	46	(25) 田鎮館跡（宮古市）	60
(12) 上代川遺跡（野田村）	47	(26) 田鎮車堂前遺跡（宮古市）	61
(13) 長途遺跡（普代村）	48	(27) 世田米城跡（住田町）	62
(14) 力持遺跡（普代村）	49	(28) 八幡沖遺跡（一関市）	63
(15) 高根遺跡（宮古市）	50	(29) 浜川目沢田 II 遺跡（山田町）	64
(16) 山口駒込 I（宮古市）	51	(30) 長谷堂貝塚（大船渡市）	65
(17) 青猪 I 遺跡（宮古市）	52		
調査報告遺跡抄録			66

平成 28 年度発掘調査の概要について

平成 28 年度の発掘調査は、当初 31 遺跡、125,748m²で開始し、最終的に 31 遺跡、139,067m²の発掘調査を実施した。調査遺跡は、沿岸部を中心に県内 6 市 4 町 2 村に所在しており、最終結果を前年度と比較すると遺跡数で 5 遺跡減、面積で 33,304m²減となっている。遺跡数・面積とも減少はしているものの震災復興関連調査については、平成 25 ~ 27 年度に引き続きピークを維持していたと考えられる。復興関連調査は復興道路の三陸沿岸道路建設関連が大半を占め、通常調査ではバイパス建設や市道改良事業に関連した調査が行われた。

時代区分でいえば、例年どおり縄文時代の遺跡が最も多かった。縄文前期の遺跡としては、芦ヶ沢 I 遺跡（久慈市）で前期前葉の集落跡が発見されたことが注目される。長軸 12m の大型住居跡を含み、各住居跡は十和田中源火山灰で覆われていた。小田ノ沢遺跡（洋野町）では、細長い尾根の平場から 14 棟に及ぶ堅穴住居跡が発見された。縄文中期の遺跡では、高根遺跡（宮古市）、長谷堂貝塚（大船渡市）、浜川目沢田 II 遺跡（山田町）、北ノ沢 I 遺跡（洋野町）が挙げられる。3 節年に及んだ高根遺跡の調査は、最終年度を迎えて斜面中腹部の堅穴住居跡と大型の貯蔵穴の調査を行った。相変わらず堅穴住居跡と貯蔵穴の密度が高く、3 節年の調査で発見された貯蔵穴は 500 基以上に上る。長谷堂貝塚は市道抵幅による細長い調査区となったが、堅穴住居跡を始め配石遺構・焼跡・貝層等が発見され、多くの貝殻や動物遺存体が出土した。浜川目沢田 II 遺跡でも尾根に複式炉を有する堅穴住居跡、斜面に大型の貯蔵穴群が展開し、さらに古代の鉄生産工房等が複合する状況であった。青森県境に近い北ノ沢 I 遺跡では、斜面部から土器捨て場が発見された。100 箱以上の土器・石器が出土し、捨て場下層面に埋設土器が分布する状況であり、次年度継続調査となつた。縄文後期～晩期の遺構としては、岩井沢遺跡（宮古市）とサンニヤ I 遺跡（洋野町）で後期の堅穴住居跡が発見された。

弥生時代の遺跡としては、上代川遺跡（野田村）・長途遺跡（普代村）が挙げられる。上代川遺跡では、弥生中期の堅穴住居跡が 30 棟と、関連する土器埋設遺構や土坑、焼土遺構が発見された。長途遺跡でも堅穴住居跡や焼土遺構が発見され、弥生中期から後期にかけての土器と土製紡錘車が出土している。

古代の集落跡としては、宮古市の田鎮車堂前遺跡・田鎮館跡・沼里遺跡・青猿 I 遺跡・千德城遺跡群等で、平安時代前期を中心とする時期の堅穴住居跡が発見されている。特に、尾根から斜面に立地する田鎮館跡から、低地の田鎮車堂前遺跡にかけて堅穴住居跡群が連續しており、古代における拠点的な集落が営まれていたことが判明した。また、追田 I 遺跡（大槌町）や八森遺跡（洋野町）、柄洞 IV 遺跡（遠野市）でも奈良～平安前期の堅穴住居跡が発見されている。

古代から中世の鉄生産関連遺構は、上代川遺跡（野田村）や高根遺跡（宮古市）等で発見された。上代川遺跡では、古代末～中世前期の製鉄炉跡 5 基と炭窯跡（木炭焼成坑）32 基、排滓場 2 箇所が発見された。製鉄炉との関係が明らかな排滓場をまとめて調査した事例として貴重であり、炭窯を含めた当時の鉄生産の状況を知る上で貴重な成果が得られた。高根遺跡では、時期は不明だが明確な地下構造をもつ 2 基の製鉄炉が発見されている。また、宮古市の千德城遺跡群・青猿 I 遺跡・沼里遺跡、山田町の浜川目沢田 II 遺跡等でも、鍛冶を中心とする鉄生産関連の工房跡が発見されている。

田鎮車堂前遺跡では 12 世紀の堀跡の調査を行った。昨年度調査区からの延長部分で、断面が逆台形を呈する幅 2m、深さ 2m 程の堀跡で、途中で土橋状の出入口が設けられていた。堀跡に伴う時期の小規模な掘立柱建物跡や井戸跡等も検出されており、居館的な堀跡内部の状況がある程度明らかに

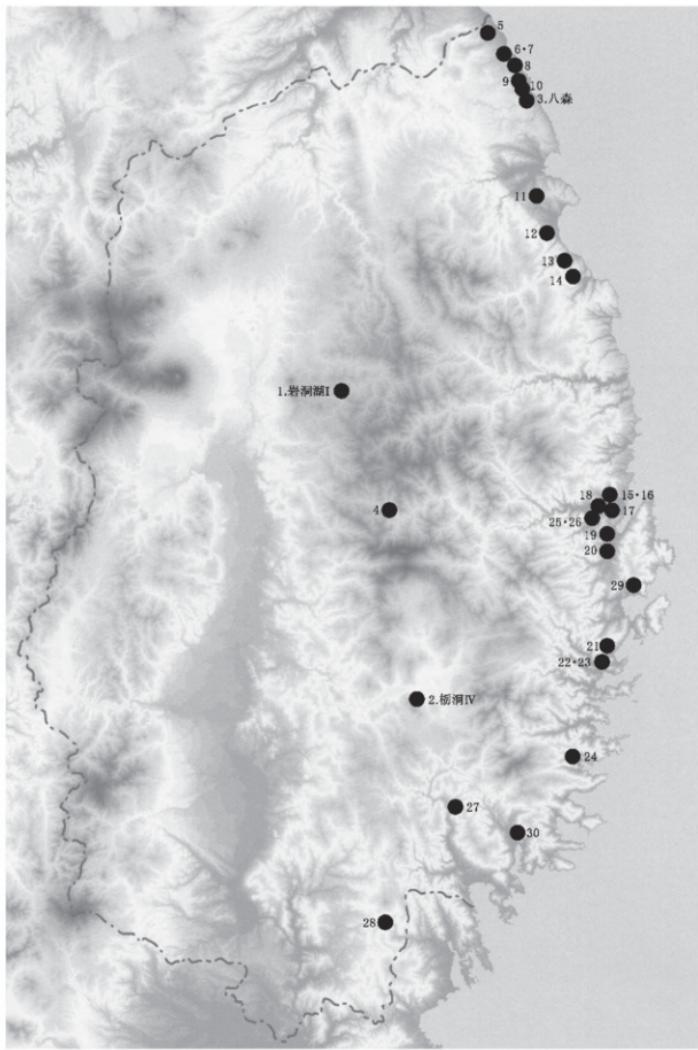


なった。

中世の遺跡は、世田米城跡（住田町）、挾田館跡（大槌町）、千徳城遺跡群（宮古市）等で城館跡の調査を行った。世田米城跡は、気仙川流域の15～16世紀頃の館跡で、腰曲輪と犬走り状の平場を確認した。平場からは柱穴等は発見されなかつたが、調査範囲において南面・西面に対する入念な防御施設が構築されていることが分かつた。千徳城遺跡群では平場等は確認されなかつたが、尾根から中世の墓壙や墓礪と同じ時期の堅穴建物跡が発見された。

今年度も復興関連調査が主体ということもあり、沿岸北部の洋野町から南部の大船渡市にかけての調査が行われた。古代から中世にかけての鉄生産関連の遺跡だけでなく、特異な立地を示す縄文時代の集落跡や沿岸北部で新たに発見された弥生時代の集落跡や中世城館跡等、内陸部に比して調査事例の少なかつた沿岸地域において貴重な調査記録が蓄積された意義は大きいといえる。

（調査課長 錆田 勉）





I 発掘調査報告



凡例

本書で記載されているコンテナの大きさについては内寸で下記のとおりである。

大コンテナ：42 × 32 × 30cm

中コンテナ：42 × 32 × 20cm

小コンテナ：42 × 32 × 10cm

本書では、遺構名称を簡素化し、遺構名称末尾に付す「跡」を省略する。

(例) 堅穴住居跡→堅穴住居、掘立柱建物跡→掘立柱建物、溝跡→溝



(1) 岩洞湖 I 遺跡

所 在 地	盛岡市玉山区戸川字亀橋地内	遺跡コード・略号	K F 61-0251・G D I -16
委 託 者	農林水産省東北農政局和賀中部農業水利	調査対象面積	1,700m ²
事業名	岩手山麓農業水利事業建設所	調査終了面積	970m ²
発掘調査期間	平成 28 年 6 月 13 日～7 月 7 日	調査担当者	村木 敬・立花雄太郎 佐々木昭太

1 調査に至る経過

「国営岩手山麓（一期）農業水利事業岩洞ダム貯水池浸食防止対策（その2）工事」予定地が岩洞湖 I 遺跡の一部にかかることから発掘調査をすることになった。

国営岩手山麓（一期）農業水利事業は、国営岩手山麓土地改良事業（昭和 16 年度～昭和 43 年度）により造成された基幹的な農業水利施設が、経年的な施設の劣化及び寒冷な気象条件の影響により、岩洞ダム、導水路及び幹線用水路のコンクリート構造物の欠損や鋼構造物の腐食等が発生し、漏水等により農業用水の安定供給に支障を来しているとともに、維持管理に多大な費用を要していることから、本事業では、施設の機能監視を行いつつダム、導水路等の改修を適時に行い、併せて関連事業において、用水路の改修を行うことにより、農業用水の安定供給と施設の維持管理の軽減を図り、農業生産の維持及び農業経営の安定に資するため平成 26 年 8 月 1 日に事業着手したものである。

なお、本工事は、岩洞ダムの波浪による湖岸浸食が西南西風の影響により進行している左岸側の湖岸について、倒木がダム管理に支障となることや、浸食による市道への影響や民地境界を侵す懼れがあると共に、周囲は県立自然公園に指定されおり、環境へ与える影響も懸念されることから、浸食の著しい区間について今後計画的に浸食防止対策を進めるものである。

当事業の工事施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、岩手山麓農業水利事業建設所から平成 27 年 10 月 28 日付け 27 北和岩第 8 号-7 「埋蔵文化財包蔵地（岩洞湖 I 遺跡）の分布調査について（依頼）」により岩手県教育委員会に対して分布調査の依頼を行った。

依頼を受けた岩手県教育委員会は平成 27 年 10 月 30 日に分布調査を実施し、調査範囲内に焼土や陥し穴状遺構と考えられる黒褐色土の落ち込みが確認されたが、遺物は確認されていない。工事に着手に先立って、岩洞湖 I 遺跡の発掘調査必要となる旨を平成 27 年 11 月 9 日付け教生第 1216 号「埋蔵文化財包蔵地（岩洞湖 I 遺跡）の分布調査について（回答）」により回答された。

その回答に基づき当建設所は、発掘調査の委託について、岩手県教育委員会と協議し、平成 28 年 6 月 10 日に公益財團法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、平成 28 年 6 月 13 日から発掘調査を実施することとなった。
(農林水産省東北農政局和賀中部農業水利事業所岩手山麓農業水利事業建設所)



第1図 遺跡位置図



(1) 岩洞湖I遺跡

2 遺跡の位置と立地

遺跡は盛岡市玉山区蔽川字亀橋地内に所在し、IGR 洪民駅より東方約 38km に位置している。岩洞湖の湖畔、湖へと流れ込む沢筋に挟まれた南西方向へと張り出した標高 695 m 前後の斜面上に立地している。斜面は標高を徐々に下げながら形成されており、湖面に隣接する箇所は浸食により崖が確認されている。現況は山林である。

3 基本層序

層序は I ~ V 層を確認できており、以下の通りである。崖を境にして上下では遺構検出面が異なり、上段では IV 層、下段では V 層である。

I 層：黒褐色土 (10YR3/2) 粘性やや弱く、しまり中。表土

II 層：黒色土 (10YR2/1) 粘性中、しまりやや強い。

III 層：灰黄褐色土 (10YR4/2) 粘性、しまり共にやや強い。

IV 層：褐色土 (10YR4/4) 粘性やや強く、しまり強い。

V 層：明褐色粘土層 (7.5YR5/8) 粘性、しまり共に強い。

4 調査の概要

調査区北側 (①) と南側 (②) では、現況が大きく異なるため調査方針に差が生じている。

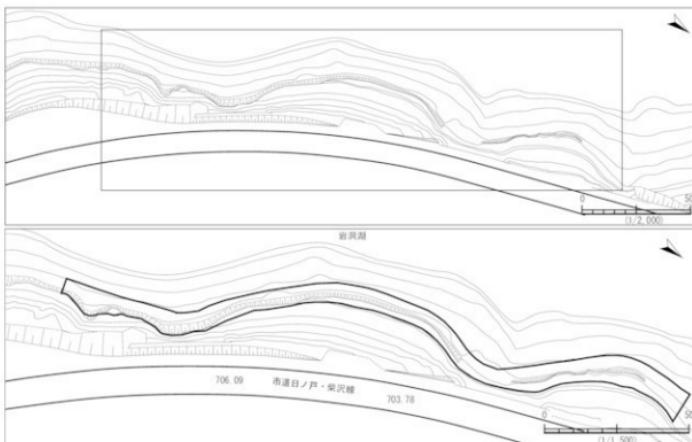
北側は湖の浸食により形成された崖の上段と下段に分けられ、上段では試掘調査、下段では検出・精査を行っている。その結果、下段からは多数の風倒木と旧河道 1 条を確認しているものの、遺構と遺物は検出されていない。

南側は、当初から急峻な崖が形成されており、遺構検出面となる湖底では岩盤が露出していたため調査までには至らず終了している。

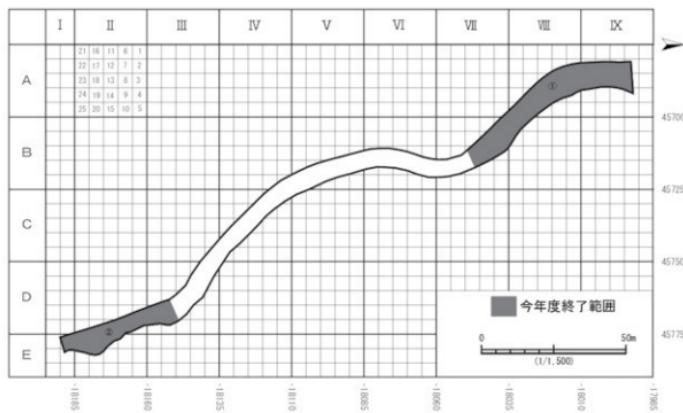
5 まとめ

今回の調査区では、当初、予想されていた焼土と陥穴は確認できなかった。

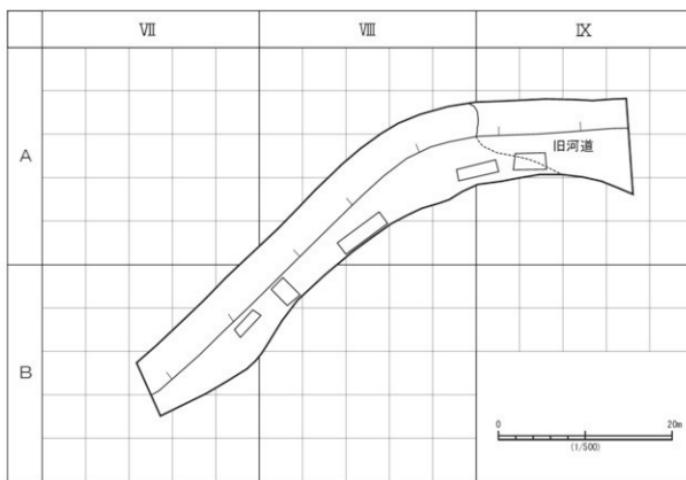
なお、岩洞湖 I 遺跡平成 28 年度調査に関する報告はこれをもって全てとする。



第2図 調査範囲図



第3図 グリッド配置図



第4図 調査区北側調査成果図



(1) 岩洞溝Ⅰ遺跡



下段南側 完掘



下段中央 完掘



上段北側 旧河道 完掘



旧河道 断面



上段南側 トレンチ完掘



上段中央 トレンチ完掘



調査前風景



作業風景

(2) 柄洞IV遺跡

所 在 地	遠野市遠野町第30地割4-1ほか	遺跡コード・略号	M F 55-0091・TH IV-16
委 託 者	国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所	調査対象面積	6.800m ²
事 業 名	一般国道283号釜石花巻道路事業	調査終了面積	6.800m ²
発掘調査期間	平成28年9月16日～11月11日	調査担当者	溜 浩二郎・川村 英 佐藤あゆみ

1 調査に至る経過

「柄洞IV遺跡」は、東北横断自動車道釜石秋田線（遠野住田～遠野間）の施工に伴って、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することになったものである。

東北横断自動車道釜石秋田線は、釜石市を起点として、遠野市、奥州市を経由し、花巻市にて東北縦貫自動車道に合流し、さらに北上市に分歧し、西和賀町、横手市、大仙市を経由して秋田市に至る総延長211kmの高規格幹線道路である。近年では、平成24年11月に宮守～東和間(23.7km)、平成27年12月に遠野～宮守間(9.0km)が供用された。

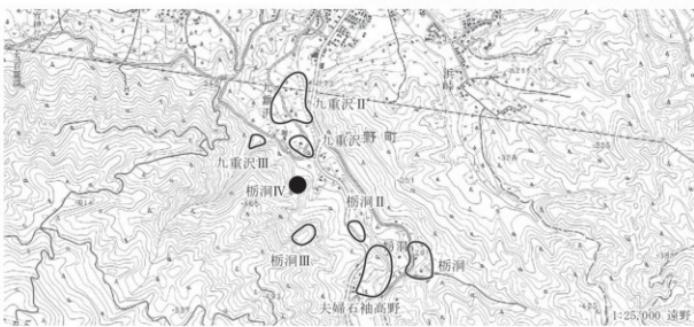
本路線は、釜石港、大船渡港といった重要港湾や観光資源豊富な三陸復興国立公園を有する三陸地方拠点都市地域と、先端技術産業の集積が著しい北上中部地方拠点都市地域や花巻空港を要する岩手県内と秋田県を結び、周辺地域のみならず岩手・秋田両県全域の産業経済発展を担うこと並びに緊急時における代替・迂回路ネットワーク機能の強化を目的とした路線である。また、東日本大震災からの復興に向けたリーディングプロジェクトとなる復興支援道路の一部でもあり平成23年度に事業化し、平成25年度には、区間の一部で工事着手している。

「柄洞IV遺跡」については、国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所の依頼を受けた岩手県教育委員会が平成24年度に分布調査、平成28年6月に試掘調査を実施し遺構が確認された。

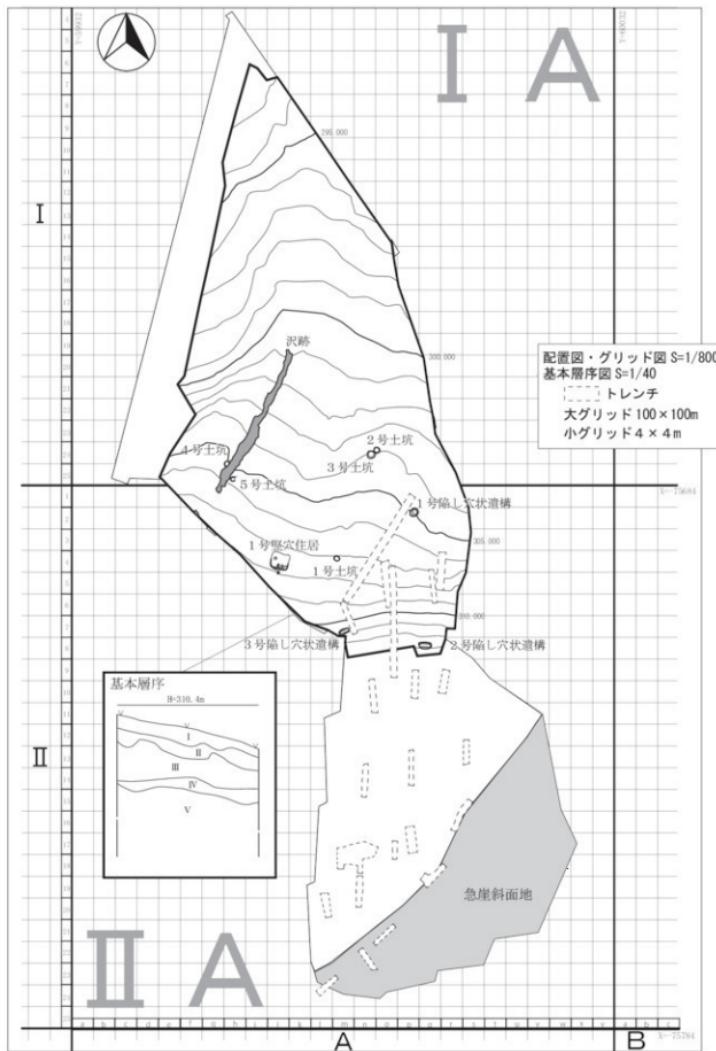
その結果を踏まえて岩手河川国道事務所は、岩手県教育委員会との調整のもとに、発掘調査を公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることにした。

これにより平成28年9月15日付けで岩手河川国道事務所長と公益財団法人岩手県文化振興事業団理事長との間で受託事業を締結、柄洞IV遺跡の発掘調査に着手した。

(国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所)



第1図 遺跡位置図



第2図 遺構配置図・グリッド図・基本層序

2 遺跡の位置と立地

遺跡は、JR 遠野駅から南へ直線距離で約 18km、遠野町第30 地割の山地に所在する。約 200m 北東には、遠野第二ダムがあり、ダムから北西は、猿ヶ石川支流の来内川による開析が進み、ひらけた平野部に遠野市街地を眺望できる。この来内川によって形成された左岸段丘には、栄洞II 遺跡（平成14年度調査）や九重沢遺跡（平成26年度調査）などがあり、本遺跡は、その左岸段丘に沿う中起伏山地に立地する。調査範囲は、南側の尾根から北面へ続く斜面地に位置し、尾根から続く急斜面は、中央付近で緩やかに変化する。尾根の南面は急崖斜面地になっている。調査範囲の標高は、約 292 ~ 340m である。

3 グリッド設定・基本層序

調査範囲を網羅するグリッドは、X=75584、Y=59932 を原点に設定した。基本層序は、グリッドII A6k 付近の調査区際壁で観察し、第 I 層から V 層に分けた（図2）。遺構の検出は V 層上面で行った。

I 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性なし しまり中 植物根多い 表土

II 10YR2/1 黒色シルト 粘性・しまり中 小礫（径3~5mm）5%含む

III 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性・しまり中 径3~5mmの小礫 10%含む

IV 10YR2/2 黒褐色シルト 50%、10YR5/6 黄褐色シルト 50% の混合土 粘性・しまり中 径3~5mmの小礫 10%含む

V 10YR5/6 黄褐色シルト 粘性・しまり中 径3~5cmの中礫 2~3%含む

4 調査の概要

調査開始時にトレチで試掘を行い、遺構や遺物が検出された部分を精査対象範囲とした。なお、野外調査で使用した仮名称は、報告書掲載にあたり、S I ○を○号堅穴住居、S K △を△号土坑といったように変更している。詳細は、第1表で対比していただきたい。

第1表 新旧遺構名対応表

旧名	新名	旧名	新名	旧名	新名
S I 01	1号堅穴住居	S K 05	4号土坑	S K 08	3号陥し穴状遺構
S K 02	1号土坑	S K 06	5号土坑	S X 01	沢跡（自然流路）
S K 03	2号土坑	S K 01	1号陥し穴状遺構	S D 01	沢跡（自然流路）
S K 04	3号土坑	S K 07	2号陥し穴状遺構		

（1）遺構と遺物

1号堅穴住居

【位置・検出状況・重複関係】調査区北側の緩斜面部南側の II A 4 j グリッドに位置し、表土除去後に V 層で検出した。斜面下方の北側半分は削平により、貼床のみが残存する状況である。また、煙道部の一部が搅乱を受けている。

【平面形・規模】平面形は方形と推定される。規模は北 - 南間は貼床が確認された範囲で約 280 m、東 - 西壁間は 322 m で、深さは最も残存する南壁上部から床面まで 22cm である。

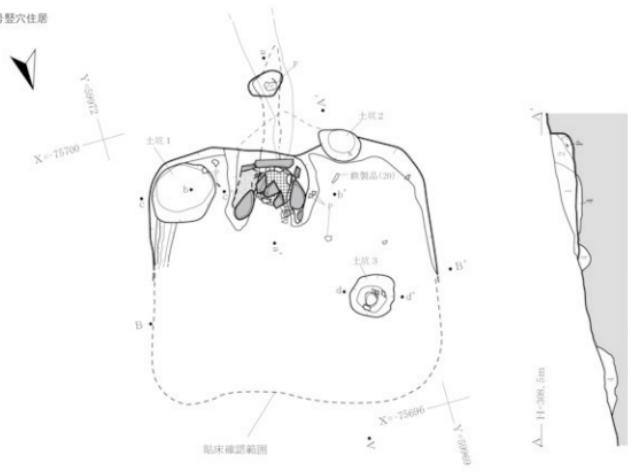
【壁・床面】壁は垂直気味に立ち上がり、床は細かい凸凹があるが、全体的には平坦で、にぶい黄褐色シルトを含む暗褐色シルト主体の貼床が 5 ~ 22cm の厚さで施されるが、特に斜面下方側である北壁沿いを中心に深い掘り込みとなっている。

【堆積土】埋土は自然堆積で黒褐色シルトを主体とし、風化花崗岩粒が混入する。

【カマド】南壁の中央よりやや東側に構築され、煙道部は割り抜き式で軸方向は S - 14° - W を向く。煙道部は住居壁面を割り抜き、7°の傾斜で煙出部に向かって上がり、長さ 54cm、最大幅 20cm で煙出

(2) 桶洞IV道路

1号堅穴住居



1号堅穴住居

A-A', B-B'

1 10YR2/1 黑色シルト 粘性・しまり中 繊2~3mmの繊2%含む

2 10YR2/1 黑色シルト 粘性・しまり中 表立い黄褐色シルト(10YR5/4)

3 10YR4/2 灰黄褐色シルト 粘性中・しまり弱 黄褐色シルト(10YR5/6)

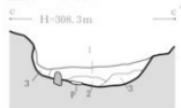
5 ~7%、褐色地を17%、白4%、2~3%、土質合計

4 10YR2/1 黑色シルト 粘性中(10YR4/2 12.5%) 黄褐色シルト30%混合

粘性中・しまり中~強 堆積土

* 2・3層は土坑2堆土

土坑1 S-1/25

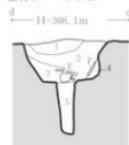


土坑1

c-c'

- 1 10YR2/1 黑色シルト 粘性・しまり中 明
黄褐色シルト(10YR7/6) ブロックで2~
3%含む
- 2 10YR2/2 黑褐色シルト 粘性弱・しまり中
- 3 10YR2/3 黑褐色シルト 粘性・しまり弱

土坑3 S-1/25



土坑3

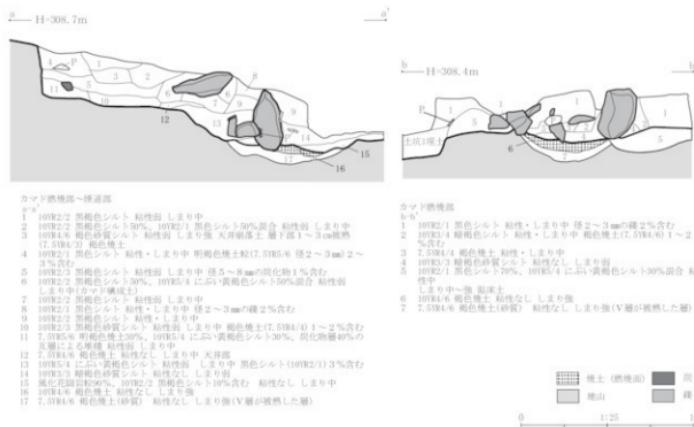
d-d'

- 1 10YR2/2 黑褐色シルト 粘性中・しまり強 黄褐色地土
12.5%含む
- 2 10YR2/2 黑褐色シルト 粘性・しまり中
- 3 10YR2/1 黑色シルト 粘性・しまり中
- 4 10YR2/1 黑色シルト 粘性・しまり中 10YR5/6 黄褐色シルト
30%混入 粘性・しまり中
- 5 10YR2/1 黑色シルト 粘性・しまり中 黄褐色シルト
(10YR5/6) 10~15%含む

■ 地上(焼成土) ■ 土
■ 雜段板 ■ 地山(未固)

0 1:25 1:50 1m (c-c', d-d')
2m (A-A', B-B')

第3図 1号堅穴住居 (1)



第4図 1号竪穴住居（2）

部へと繋がる。煙出部は開口部径 41 × 27cmで、埋土下層には 2 ~ 3 cm ほどの炭化物が多く混入している。開口部から底面までの深さは 26cm で、煙道部の底面より 8cm ほど高い。カマド構築土はにぶい黄褐色シルトを含む暗褐色シルトを主体とし、袖部の芯材には礫を据えて構築されている。焼成面の焼土範囲は 40 × 40cm である。

〔遺物〕遺構内から出土した遺物 1 ~ 20 を掲載した。1 ~ 10 は土師器環で、1 ~ 5 がカマド崩落土内、6 ~ 7 は土坑 1 ~ 8 はロクロビット（土坑 3）、9 ~ 10 は床面からの出土である。器面調整はいずれも外面がロクロナデで、1 ~ 2 ~ 4 ~ 9 は下部にケズリが施されている。内面は 1 ~ 8 がミガキで 1 ~ 3 は黒色処理が施されている。1 の口縁部には人為的に切断したような痕跡が確認できる。9 ~ 10 はロクロナデで 9 は下半にナデが施されている。底部の切り離し技法が確認できたのは 1 ~ 2 ~ 4 ~ 9 ~ 10 でいずれも回転系切によるもので、1 ~ 2 ~ 9 は切り離し後にケズリによる再調整が施されている。3 ~ 5 ~ 6 ~ 8 はケズリによる再調整のため切り離し技法が不明である。また、7 の底部内面の剥落部分には回転系切痕が確認できる。11 は高台付の环でロクロビット（土坑 3）から出土した。口縁と台部は欠損している。器面調整は外面ロクロナデ、内面ミガキ、底部外側ケズリで内面に黒色処理が施されている。12 ~ 17 は甕で 17 は土坑（土坑 1）内、他はカマド周辺からの出土である。成形は 12 ~ 15 が非ロクロ、16 ~ 17 はロクロが使用されている。器面調整は 12 ~ 15 は胴部外側にナデ・ケズリが施されている。18 は器種不明で部位は胴～底部で胴部の上位先端が内傾した形状を呈する。

19 は土鉢でロクロビット（土坑 3）から出土した。先端の紐孔部が欠損しているが、全長 7.1cm、体部径は 5.2cm である。体部は肩が張り、内部は空洞になっている。下部には長さ 5.0cm、幅 0.6cm の溝状の開口部分がある。内部には球状の玉が 1 個あり、径 1.5cm を測る。

20 は鉄鏹でカマド右袖付近の床面から出土した。形状は雁又状を呈し、長さ 14.8cm、幅 4.8cm、軸部分の厚さは 0.6cm を測る。片側先端部が欠けている。

〔時期〕出土した遺物から 10 世紀前葉と考えられる。

(2) 桶洞IV遺跡



第5図 土坑・陥し穴状遺構

1号土坑

〔位置・検出状況〕グリッドII A 4m付近に位置する。黒色シルトの円形プランをV層で検出した。〔規模・形状〕開口部 104 × 98cm。残存深度 46cm。平面形は円形を呈する。〔埋土・堆積状況〕底部直上に堆積するのは、V層相当の黄褐色シルトをブロックで含む黒褐色シルトである。埋土の様相から自然堆積と考えられる。〔壁・底面〕壁は南側の一部で内傾するが概ね緩やかに外傾する。底面は平坦である。〔重複遺構〕なし。〔出土遺物〕なし。〔帰属時期〕検出状況から縄文時代と考えられるが詳細は不明である。

2号土坑

〔位置・検出状況〕グリッドII A 24o付近に位置する。黒褐色シルトの円形プランをV層で検出した。〔規模・形状〕開口部 107 × 114cm。残存深度 50cm。平面形は円形を呈する。〔埋土・堆積状況〕径の細かい風化花崗岩粒を含む黒褐色シルトが堆積する。擾乱が重複し一部掘りすぎている。埋土の様相から自然堆積と考えられる。〔壁・底面〕直立気味に外傾する。底面は、概ね平坦である。〔重複遺構〕なし。〔出土遺物〕なし。〔帰属時期〕検出状況から縄文時代と考えられるが詳細は不明である。

3号土坑

〔位置・検出状況〕グリッドII A 24n付近に位置する。黒褐色シルトの円形プランをV層で検出した。〔規模・形状〕開口部 151 × 145cm。残存深度 54cm。平面形は円形を呈する。〔埋土・堆積状況〕主体となるのは、径の細かい風化花崗岩粒を含む黒褐色シルトである。西壁際には、V層相当土の黄褐色シルトがブロックで含まれる。埋土の様相から自然堆積と考えられる。〔壁・底面〕壁は直立気味に立ち上がり、開口部で外傾する。底面は若干掘り鉢式に凹む。〔重複遺構〕なし。〔出土遺物〕なし。〔帰属時期〕検出状況から縄文時代と考えられるが詳細は不明である。

4号土坑

〔位置・検出状況〕グリッドII A 25h付近に位置する。沢跡の掘削時に検出した。そのため、沢跡の掘削と並行し埋土上部を掘り上げていたが、沢跡の堆積土とは異なる黒褐色シルトの範囲が認められ、土坑と判断し精査に着手した。〔規模・形状〕開口部 100 × 99cm。残存深度 66cm。平面形は、一部沢跡と重複しているが円形を呈すると考えられる。〔埋土・堆積状況〕底面直上に堆積するのは、黒褐色シルトである。西壁際には、暗褐色シルトと褐色シルトの混合土が堆積する。〔壁・底面〕壁は、内傾して立ち上がり開口部で外傾する。底面は概ね平坦で、V層に含まれる巨礫（風化花崗岩）が露出する。〔重複遺構〕なし。沢跡には切られる。〔出土遺物〕縄文土器(21)。〔帰属時期〕出土遺物から縄文時代と考えられる。

5号土坑

〔位置・検出状況〕グリッドII A 25h付近に位置する。黒色シルトの円形プランをV層で検出した。〔規模・形状〕開口部 91 × 80cm。残存深度 36cm。平面形は、一部擾乱と重複しているが円形を呈すると考えられる。〔埋土・堆積状況〕黒～黒褐色シルトが主体となる。黄褐色シルトがブロック散見されるが、重複している擾乱の影響と考えられる。〔壁・底面〕壁は外傾気味である。底面は、擾乱のため若干の凹凸があるものの概ね平坦である。〔重複遺構〕なし。〔出土遺物〕なし。〔帰属時期〕検出状況から縄文時代と考えられるが詳細は不明である。

1号陥穴状遺構

〔位置・検出状況〕グリッドII A 2p付近に位置する。黒色シルトの円形プランをV層で検出した。〔規模・形状〕開口部 168 × 140cm。残存深度 155cm。平面形は、検出時に円形プランであったが、黒色シルトの下に堆積するにぶい黄褐色シルトを掘削すると梢円形となった。〔埋土・堆積状況〕底面直上には、

(2) 桶洞IV遺跡

褐色砂質シルトと黒褐色シルトが互層になり堆積する。壁際に堆積する3層は、V層相当土が多く含まれる。埋土上位はレンズ状の堆積で自然堆積の様相を示す。〔壁・底面〕壁は、直立に立ち上がり、上部で大きく外傾する。底面は平坦である。〔重複遺構〕なし。〔出土遺物〕なし。〔帰属時期〕遺構の形状から、縄文時代の階級穴状遺構と考えられる。

2号階級穴状遺構

〔位置・検出状況〕グリッドII A 8q付近に位置する。V層で黒褐色シルトの長楕円形プランを検出した。〔規模・形状〕開口部 232 × 126cm。残存深度 170cm。平面形は、長楕円形を呈する。〔埋土・堆積状況〕土層断面の観察は、長軸で行っている。底面直上に堆積するのは、マサ化した明黄褐色シルトを含んだにぶい黄褐色シルトである。全体的にマサ化した黄褐色シルトやIV～V層相当の黄褐色シルトが含まれる。4層には、黒褐色シルトが帶状に認められることからも自然堆積と考えられる。〔壁・底面〕壁は直立に立ち上がり開口部で外傾する。底面は概ね平坦である。〔重複遺構〕なし。〔出土遺物〕なし。〔帰属時期〕遺構の形状から、縄文時代の階級穴状遺構と考えられる。

3号階級穴状遺構

〔位置・検出状況〕グリッドII A 7m付近に位置する。V層で黒褐色シルトの長楕円形プランを検出した。〔規模・形状〕開口部 199 × 98cm。残存深度 150cm。平面形は、長楕円形を呈する。〔埋土・堆積状況〕底面直上に堆積するのは、にぶい黄褐色シルトである。その上面である7層は硬化が著しい。東壁に堆積する3層は、斜面上部から供給されたIV～V層土が堆積したと考えられ、自然堆積の様相を示す。〔壁・底面〕壁は直立気味に立ち上がり外傾する。底面の南側は調査時に掘りすぎたため全容は不明であるが平坦と推測される。〔重複遺構〕なし。〔出土遺物〕なし。〔帰属時期〕遺構の形状から、縄文時代の階級穴状遺構と考えられる。

(2) 遺構外出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、縄文土器 521.1g、土師器 6,950.6g、土製品 1点、鉄製品 1点、銭貨 1点、石器 1点である。土師器の大部分と土製品・鉄製品は、1号堅穴住居からの出土であるため、前節のとおりである。以下は、遺構外の出土遺物について概要を記載する。

23は、沢跡から出土した縄文土器である。口縁頂部と内面に溝が巡りA字状の突起が認められ、縄文時代晚期中葉から末葉に帰属すると考えられる。26と28は、小片の縄文土器であるが、沈線に沿う斜位・綾杉状連続刺突文の特徴から明神裏III式に比定されると考えられる早期中葉のものである。同形式の土器は、本遺跡に近接する桶洞II遺跡や九重沢遺跡でも出土している。29は、寛永通宝である。「寶」の字体から新寛永とと考えられ「永」の末尾が跳ね上がる秋田錢の特徴が窺える。そのため、元文3(1738)年以降に鑄造された可能性が高い。背面は無文。

5まとめ

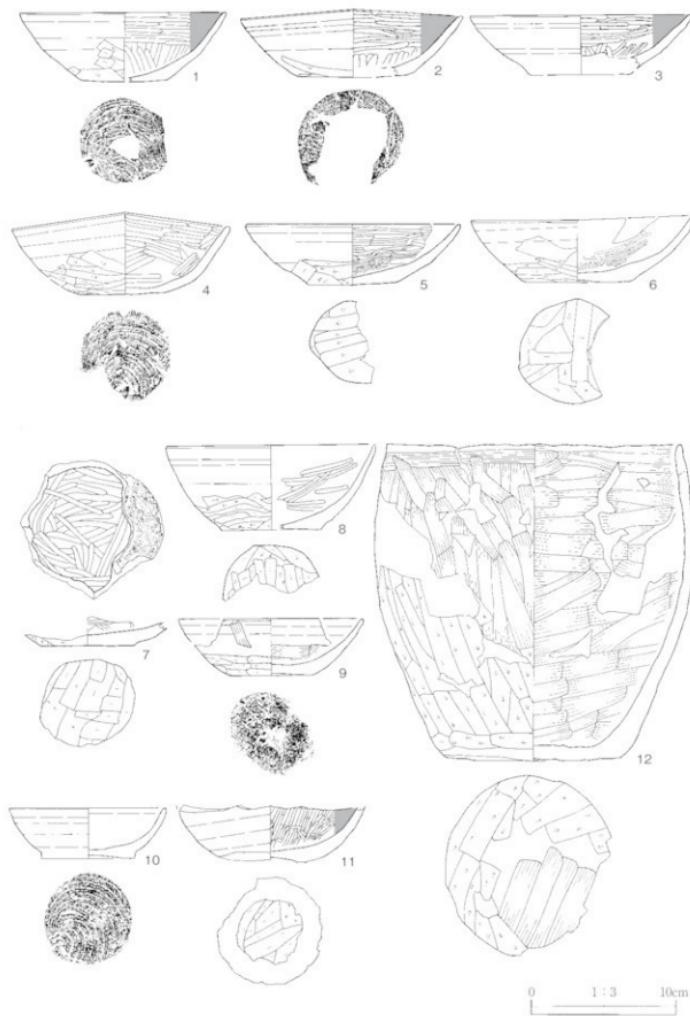
今回の調査で古代の堅穴住居が見つかったことから、当時この地が生活の場として利用されていたことが明らかになった。住居内からは土器・鐵鏃・土鈴などの遺物や土器生産を行った痕跡であるクロビットが見つかった。

縄文時代は隣接地に集落遺跡は存在するが、調査区内からは堅穴住居等の遺構は見つかっておらず、出土遺物も少ないと主に狩猟場として利用されていた可能性が考えられる。

なお、桶洞IV遺跡平成28年度調査に関わる報告はこれをもって全てとする。

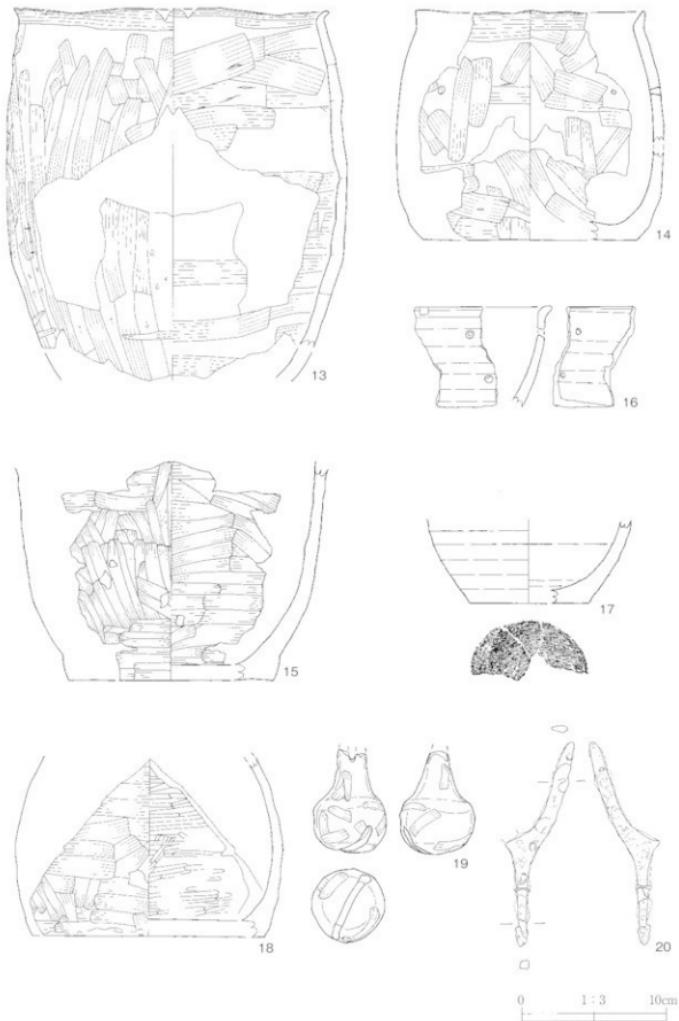
参考文献 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

- 2004 「九重沢遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第435集
- 2003 「桶洞II遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第436集

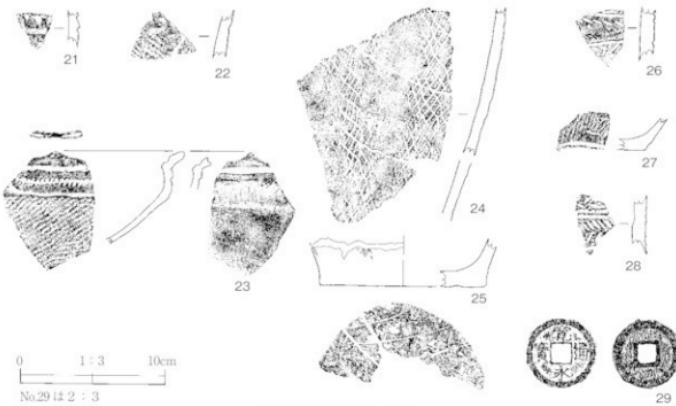


第6図 土器(1)

(2) 楊洞IV遺跡



第7図 土器器(2)、土製品、金属製品



第8図 繩文土器、錢貨

第2表 1号整穴住居出土遺物観察表

(1) 土器器

No.	層位	断面	部位	断面測量			計測値 (cm)	備考	図	写
				外壁	内壁	通間外壁				
1	カツア跡土上	井	口縁～底面	ロコナダ、下壁 サミナ	内壁、上ガキ	内輪内切一ケタリ	15.3	1.9	5.9	口縁部に切削痕あり
2	カツア跡土上、カツア跡土上に複数の土器、カツア跡土上に複数の土器、住居 内土上に複数の土器	井	口縁～底面	ロコナダ、下壁 サミナ	内壁、上ガキ	内輪内切一ケタリ	15.0	4.7	6.5～7.5	
3	カツア跡土上、住居、住居内土上に複数の土器	井	口縁～底面	ロコナダ	内壁、上ガキ	再調節(ケタリ)	(15.4)	4.1	10.0	
4	カツア跡土上に複数の土器、カツア跡 土上に複数の土器	井	口縁～底面	ロコナダ、下壁 サミナ	下壁	内輪内切	14.8	3.5	6.2	
5	カツア跡土上、住居内土上に複数の 土器	井	口縁～底面	ロコナダ、下壁 サミナ	下壁	再調節(ケタリ)の ための内側に擦痕	(14.0)	4.2	6.0	
6	住居内土上に複数の 土器	井	口縁～底面	ロコナダ、下壁 サミナ	下壁	再調節(ケタリ)	15.3	4.3	7.2	
7	住居内土上に複数の 土器	井	口縁～底面	ロコナダ、下壁 サミナ	下壁	再調節(ケタリ)の ための内側に擦痕	—	6.5	底面内の擦痕部分に凹凸 が認められ	
8	住居内土上に複数の 土器	井	口縁～底面	ロコナダ、下壁 サミナ	下壁	再調節(ケタリ)の ための内側に擦痕	(14.4)	3.8	10.0	内面に採付箇所
9	直面	井	口縁～底面	ロコナダ、下壁 サミナ	下壁	内輪内切～再調節 (ケタリ)	12.8	4.0	5.5	内面に採付箇所
10	直面	井	口縁～底面	ロコナダ	内壁	内輪内切	(10.0)	3.5	6.4	
11	住居内土上に複数の 土器	直面	口縫～底面	ロコナダ	内壁、上ガキ	ケタリ	—	(3.8)	—	台脚剥落により欠損
12	カツア跡土上、直面	井	口縁～底面	ロコナダ	内壁、上ガキ	内輪内切、ケタリ	(10.4)	21.8	12.0	外面上に採付箇所
13	カツア跡土上、カツア跡土上に複数の 土器、住居内土上に複数の 土器、住居内土上に複数の 土器	井	口縁～底面	ロコナダ	内壁、上ガキ	内輪内切、ケタリ	—	21.7	25.7	—
14	カツア跡土上、住居内土上に複数の 土器、住居内土上に複数の 土器	井	口縁～底面	ロコナダ	内壁、上ガキ	内輪内切、ケタリ	(15.4)	15.4	(14.0)	
15	カツア跡土上、カツア跡土上に複数の 土器、住居内土上に複数の 土器	井	口縁～底面	ロコナダ	内壁、上ガキ	内輪内切、ケタリ	—	(15.1)	(14.2)	内面に採付箇所
16	住居内土上に複数の 土器	井	口縁～底面	ロコナダ	内壁、上ガキ	内輪内切	—	—	—	孔2箇所あり
17	カツア跡土上、カツア跡土上に複数の 土器	井	口縁～底面	ロコナダ	内壁、上ガキ	内輪内切	—	(3.8)	(8.2)	
18	カツア跡土上、住居内土上に複数の 土器	井	口縁～底面	ロコナダ	内壁、上ガキ	内輪内切	—	(11.2)	(11.2)	

(2) 土器

No.	層位	断面	形状	断面高(cm)	底大径(cm)	裏面(g)	外表面形態	備考	図	写
19	1号室(1段目)	井	直面	7.1	5.3	76.0±2.0	底面、側面部分剥離	—	—	—

(3) 金属製品

No.	層位	断面	素材	羽様	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	図	写
20	床面	鉄	鉄錠	—	14.0	4.8	0.6	23.25	板文式	7	7



(2) 楠洞IV道路



航空写真（俯瞰）南から



調査区全景・N→



調査前状況写真・S→



トレンチ掘削作業



基本層序・E→

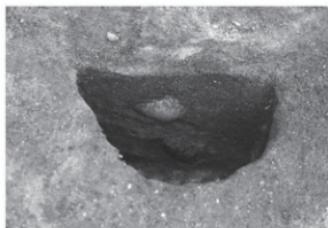
写真図版1 航空写真、調査区全景、基本層序



全景・N→



断面・W→



カマド煙出部断面・E→



カマド全景・N→



カマド煙道部断面・E→

写真図版2 1号竪穴住居（1）